2025 年3月 16 日 受難節第 2 主日礼拝メッセージ

「実によって木を知る」　　牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 12 章 22−37 節

3月も半ばに入り、暖かくなって、梅の花も満開になって来たかと思っていた矢先、また急に寒くなったりして、落ち着かない天候が続いています。昨日、この久宝まぶねこども園では、卒園式が行われましたし、小学校や中学校でも卒業式が行われる季節となっています。昨日は、私もこども園の卒園式に参加していました。卒園児たちの在園期間はそれぞれで、0 歳から入園して 6 年間をすごされたお子さんも、5 年間を過ごされたお子さんも、人によっては3年間や1年間という人もおられました。在園期間はそれぞれですが、この園で一緒に生活をして、様々な経験を重ねて、確かに成長して来られました。もちろん、子どもたちは一人一人みんな違っていますから、得意なことも不得意なことも当然ありますし、体の大きさも、成長の速度も、それぞれです。それらは他人と比べられることではありませんが、みんなが多くのことを感じ、また学び、そして身につけ、成長して来たということは、確かなことであり、そのことは子どもたち自身も、また保護者の方々も、実感しておられたのだと思います。今回の聖書の言葉として、「木の良し悪しは、その実によって分かる」（マタイ 12：33）とありましたが、嬉しそうに、また誇らしそうに微笑んで卒園していった子どもたちの姿、またその子どもの成長を目にして涙を流されている保護者の方々の姿、それから担任を始めとするこども園の先生方の涙を流されている姿を見ながら、「このこども園での生活は、（もちろん色々なことがあったでしょうが）よい物だったのだろうなぁ」と、改めて感じさせられた心温まる卒園式でした。

それから、先週の出来事として、もう一つ。先日 3 月 11 日は、東日本大震災から 14 年目となる日でした。先週の「週報」でもお知らせしておりましたが、日本基督教団の各地の教区でも、東日本大震災とその被災者、遺族の方々を覚えての、記念礼拝が行われていました。そんな 3 月 11 日でしたが、いわゆる「狭山事件」で犯人とされた石川一雄さんが、第三次再審請求の最中、86 歳でお亡くなりになったそうです。「狭山事件」について、私自身は教団の部落解放センターや、教区の部落解放委員会が開催している研修会などを通して学びました。石川さんの訃報に接して、多くの方々が SNS に追悼の思いを綴っておられましたが、私の友人も SNS に「狭山事件」の概略をまとめていましたので、紹介します。

「（今から 62 年前の）1963 年 5 月、埼玉県狭山市で女子高校生が行方不明になり、犯人から脅迫状が届いた。が、40 人もの警察官が張り込みしながら、警察は身代金を取りに現れた犯人を取り逃がしてしまった。女子高校生は遺体となって発見され、警察の大失敗に世論の非難が集中した。捜査に行き詰った警察は、地域住民の『あんなことをするのは部落民にちがいない』という声から、付近の被差別部落に見込み捜査をした。そして当時 24 歳だった石川一雄さんを別件逮捕し、1 カ月にわたり警察の留置場で取り調べ、ウソの自白をさせるよう追い込んだ。人々の差別意識やマスコミの差別報道、そして、警察の決めつけと焦りによって冤罪が生み出されたのだ。石川さんは無期懲役で収監された後、1994 年、55 歳の時に仮釈放で出獄し、以後『これは冤罪である』と訴え、無罪判決を勝ち取るための再審請求を続けて来られていた。第三次再審議求の最中、『見えない手錠を外す』戦いの道半ばであった。石川さんの尊厳を取り戻すための戦いはこれからも続く。これは石川さんだけの問題ではない。この社会の人権のあり方をめぐる問題である」

石川さんは仮釈放後も、「まだ『見えない手錠』がかかったままです。無罪の判決を聞いて初めて『見えない手錠』が外れる。それまでは両親の墓に行くわけにはいかない」とお話しされ、ご両親のお墓参りには行っていなかったそうですが、ついにその日は訪れませんでした。「特定の地域に暮らしている」というだけで、被差別部落への偏見で犯罪の犯人に仕立てあげられる司法の力は恐ろしいものです。これは石川一雄さん一人の問題ではなく、また昨年、事件から 58 年を経てようやく無罪が確定した袴田巌さん一人の問題ではなく、この社会の中で、いつ誰に起こってもおかしくない問題であり、忘れたり、無関心になったりしてはならない問題なのだと思っています。キリスト教関係の方々だけではなく、多方面で多くの方々によって活動が今後も続けられていくことと思います。

さて、今回の聖書のお話は、イエス様とファリサイ派の人々との問答のお話でした。ですが、今回の 22 節のお話の前から、そもそも「マタイによる福音書」12 章全体が、「自分たちこそが『正統』である」ということを自負していたファリサイ派の人々に対して批判する一連の流れとなっています。12 章の 1 節から 8 節ではイエス様一行は「何も仕事をしてはならない」と定められていた安息日に、「麦の

穂を摘んで食べるとは何事か」とファリサイ派に言われて問答していますし、また9 節以降では安息日に会堂で、片手の萎えた人に手当てをした事で「安息日に治療行為をするなんて」と言われて問答しています。ガリラヤ地方のあちこちを訪ねられたイエス様たちは、新しい教えを説かれた教師として有名だったというよりも、まずは癒し人として有名になったようです。そのために、行く先々で様々な病気や障がいを持っていた人たちが、イエス様の所にたくさん連れて来られたと福音書には記されています。23 節以降の「目が見えず口の利けない人」もそのような一人でした。そしてイエス様が手当てされると、「ものが言え、目が見えるようにな」りました。それが、具体的にどのように改善、回復したのか、ということはよくは分かりませんが、「群衆は皆驚いた」（23）とありますから、周りの人々から見ても分かるような、何かしらの変化があったのだと思われます。そして人々は、「まさか、この人がダビデの子ではあるまいか」（23）、即ち、待ちに待っていた救い主、メシアではないかと口々に言いました。

それを聞いて面白くなかったのが、ファリサイ派の人たちでした。何せ自分たちが「大事だ」と人々に伝えている安息日の規定すら、ないがしろにするようなイエスなどと言う素性の知れない、むしろ卑しい生まれの無学な男が、大勢の人々に歓迎され支持されるなんて許せない。「人々を惑わし、扇動する悪い奴だ」ということで、ファリサイ派の人たちは、「どのようにしてイエスを殺そうかと相談し」（14）ていた程でした。そして言いました。「あの男、イエスが悪霊を追い出しているのは、『悪霊の頭（かしら）ベルゼブルの力によって』いるに違いない」（24）。即ち、イスラエルの神ヤハウェの力、聖霊の力ではなく、忌（い）むべき悪霊の力によっているのだから、メシアであるはずがない、というわけです。しかし、イエス様はハッキリと返答されました。「サタンがサタンを追い出せば、それは内輪もめだ」（26）そんなことがあるはずないだろう。

さらに、もし本当に「私がベルゼブルの力で悪霊を追い出しているのであれば、あなたがたの仲間は何の力で追い出すのか」（27）とも言われました。つまり、「あなた方の仲間だって、悪霊を追い出し、人々を癒しているじゃないか。それも私と同じように、ベルゼブルの力だと言うのか」ということです。今から約 2000 年前の当時は、様々な病気も障がいも、悪霊や罪や穢（けが）れのせいだと考えられていました。そしてそれらを癒し、治療するために、様々な癒し人たちがいました。ですから決して「神の子イエス様一人だけが、特別な癒しができた」というわけではあり

ませんでした。例えば、「マルコによる福音書」9 章には、イエス様の名前を無断で語って悪霊を追い出している人たちがいるということを、イエス様が耳にし、その上で、弟子たちに対して「止めさせてはならない。私たちに反対でない者は、私たちの味方なのだ」（マルコ 9:40）と言われたという記事があります。大事なのは今、悪霊に取りつかれている人が、その悪霊から解放されることであり、その解放の業、癒しの業を邪魔しない人は皆、自分と共にいる者である。だから、たとえファリサイ派の人たちであっても、悪霊を追い出す解放の業を行っている人は、私の同志であり、味方、仲間なのである、ということでした。

そして 33 節以降は、「木の良し悪しはその実によって分かる」、「実によって木を知る」というお話に移っていきます。口で何を言っているかや、その人の身分や立場がどうか、ということではなく、実際の行動として一体何をしたか、しなかったかこそが、大事なのだということでしょう。「木が良ければその実も良いとし、木が悪ければその実も悪いとしなさい」（33）という言葉と同じ言葉が、「マタイによる福音書」7 章 17 節 18 節にもあります。「すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実を結ぶことはなく、また悪い木が良い実を結ぶこともできない」……。

傷ついた人や病気の人に寄り添い、手当てをするということも、部落解放や冤罪事件解決のために戦うことも、小さな子どもたち一人一人の「たましい」と人格に真摯に向き合い、共に成長するということも、それらは全てキリスト教の専売特許ではありません。むしろ、クリスチャン人口が 1%という日本の中では、クリスチャンではない人たちが担っておられる部分の方が、圧倒的に大部分なのだろうと思います。ですが、その木の良し悪しは、その実によって証明され、判断されます。どのような主義や主張、信仰を持っていたとしても、実が正しいかどうか、行動と結果が正しいかどうかで、真実が測られます。「自分たちこそが正しい」と主張するだけだったファリサイ派の人たちが、イエス様から批判されたことを思い起こし、私たちもまた「自分たちこそ正しい」と思い上がることがないようにしたいと思います。そして、大切なこととして、イエス様がその身をもって示されたように、私たちもまた言葉ではなく行動をもって、イエス様の道につながって歩む者へと、今日もここから変えられて参ります。